

第18期 第6回常任理事会議事録

日時 昭和50年2月3日(月) 14.00~17.10

場所 気象庁海洋気象部会議室

出席者 磯野, 小平, 浅井, 奥田, 河村, 神山, 高橋,
二宮, 野本, 丸山, 各常任理事
川村, 三谷, 各理事

報告

〔庶務〕

北海道支部から来年は、札幌管区気象台創始100年記念行事のため多忙となるので、昭和51年度の当番支部を他の支部にお願いしたい。

〔会計〕

1. 1月22日, 三報社と来年度の天気, 集誌の印刷経費について交渉した。印刷費と発送経費は, 15% up, 集誌編集費は15% upになる。

2. 1月15日現在における会費前納状況は次のとおりである。

内国	A会員88%	B会員87%
学生会員	〃 48%	〃 52%

〔天気〕

“会員の広場”を充実する。

〔ノート〕

現在印刷中のものNo. 122, 123 雲物理特集Ⅱ, Ⅲ

〔講演企画〕

1. 夏季大学の収支

気象庁がテキストを例年どおり購入してくれるので、約10万円の黒字となる。会計に納入される。次期夏期大学は、森重出版が倒産したので、小中学校理科教育へのPRができなくなった。続けるかどうか再検討したい。

2. 秋季大会シンポジウム

海陸風

話題提供

- 1) 瀬戸内海沿岸付近における海陸風と大気汚染
宮田賢二(広島女子大)
- 2) 海陸風と沿岸都市汚染 佐藤功(大阪管区)
- 3) 関東地方の汚染シミュレーション 河村武(気研)
- 4) 海陸風のシミュレーション 荒川正一(気大)

構造物の耐風性に関するシンポジウムの次期当番学会は、土木学会に決まった。

〔南極〕

1. 第17次南極地域観測研究観測計画の来年度予算として350万円(要求2,000万円)配分されることが内定した。研究題目: 南極におけるエアロゾルおよび微量気体成分の研究観測

主任研究者 斎藤博英

議題

1. 学会賞・藤原賞受賞者について

○学会賞 推薦委員会より報告のあった次の2件(ただし賞金は1件2万5千円づつとする)に授賞することについて全理事に書面審査を依頼する。

栗原宜夫(アメリカ海洋大気庁地球流体力学研究所)

業績 統計的, 力学的, 大気大循環モデルの確立と, その適用による大気大循環の季節変動の研究

田中正之(東北大学, 理学部教授)

業績 混濁大気の放射伝達特性に関する研究

○藤原賞 推薦委員会より報告のあった次のものについて全理事に書面審査を依頼する。

斎藤直輔(気象研究所予報研究部長)

業績 力学的, 熱力学的方法によるシノプティック解析の開発。

2. 中部支部について

発足にあたって同地区の理事は1名であるが、役員改選を行なわないで、次期役員選挙まで現状のままとする。

3. 気象研究ノート定期購読者に対する購読料の割引について検討することになった。

4. 学術会議と学協会との懇談会に提出する議題について

補助金の増額, 学会出席旅費等が提案されたが次回の常任理事会で更に検討する。

5. 外国在任会員の会費額について

外貨取立手数料, 外国語翻訳料が必要のため国内会員より若干高くなるのはやむを得ない。

6. 昭和50年度総会準備について

1) 会費を平均10%程度値上げすることとし, 定款の一部改正案を提出する。

2) 大会委員長は, 山崎正博氏に依頼する。

3) 昭和51年度当番支部は中部支部と交渉する。

7. 気象百年記念論文集刊行について

次の計画を了承し, 全理事に書面審査を依頼する。

1) 委員会の名称を気象庁百年記念刊行物編集委員会とする。

2) 記念号の名称を「最近の気象学と気象事業の展望—気象庁創立百年を記念して—」(仮称)とする。

3) スケジュールを次のようにする。

昭和50年2月初旬に天気, 気象庁ニュースなどでこの計画を公示する。

8月末原稿〆切11月末印刷所に送付昭和51年2～3月
発刊

4) 印刷頁数 200 頁程度, 20編くらいを一応の目安と
する。

5) 内容は, 仮題のように現在における気象学と気象
事業の展望 (過去, 未来を含む) とする。

6) 13編程度を依頼原稿, 7編程度を募集する。

7) 編集委員 内田英治 (長) 浅井富雄 河村 武
竹内清秀 丸山健人 鷺崎 博

幹 事 金子光行

担当理事 高橋浩一郎

承認事項 浦川武雄ほか2名の入会を承認



気象庁予報部編

“異常天候監視報告”

この10年ぐらひは, 世界の各地から何十年, 何百年,
時として何千年ぶりといった“異常気象”が数多く報じ
られてきており, 昨今ではよほどの異常現象でもない限
り, 気にとめなくなった感さえする。しかし, 現実には
この種の現象は引き続き起こっている。このような異常
気象の多発は, 気候体制の変化に関連するのではない
か, といった見方も一部にはなされているが, その解明
の手掛かりを掴むためにも実態を把握しておくことがた
いせつである。

気象庁では, 今年度から新たに世界の異常天候を監視
する業務を開始し, その成果を年2回報告書として発表
することになった。第1号 (1974年1月～6月分, B5
版, 42頁) は昨年10月に刊行され, また第2号 (7月～
12月分) もこの3月に刊行される。以下にその概略を紹
介する。

内容は, 解説編と資料編に分かれている。

まず, 解説編では, 半年間の①各月の世界の天候経過
の概要が南・北両半球について解説されており, おもな
現象が記述されている。ついで, 月平均気温の異常高・

低温 (標準偏差の2倍以上) の出現地点, 月降水量の多
雨 (5分位法による階級区分 $Rd=6$)・少雨 ($Rd=0$)
の地点が符号化されて②異常天候発生分布図として南・
北両半球について示されている。

解説編の最後には, 北アメリカ・カナダ, ソビエト・
ヨーロッパ, アジア, 東南アジア・アフリカ, 南アメリ
カおよびオセアニアの③地域別の天候特性がくわしく解
説され, また要約も載っている。

資料編では, ①北半球月平均気温偏差および月降水量
の多雨・少雨域分布図 (この場合の多雨は $Rd=5$ と6,
少雨は 0と1), ②北半球月平均気圧分布図が掲載され
ている。ついで, 北半球の主要穀倉地域における気温の
変動をみるために, ③半旬平均気温偏差経過図 (北半球
の9地点については1000—500mbの層厚から推定, そ
の他長春, 漢口, 広島, 新潟および旭川の気温偏差グラ
フ) が示されている。最後に, 月平均気温偏差が標準偏
差の2倍以上, または Rd が0と6を示した全世界の
地点についての④異常天候の気候表が月別にくわしく示
されている。

以上の資料は, 毎月南・北両半球の約1300地点から入
電する月気候電報 (CLIMAT) に基づくもので, 後日
多少訂正される部分があるかもしれないが, 最新の世界
各地域の天候の特性をみるには十分であろう。

なお, この報告物は気象官署, 関係省庁ならびに各大
学などに配布されているが, 販売については気象協会で
取り扱っている (1号2号とも1,3000円)。

(関根勇八)